

令和7年1月18日・2月1日実施古文書勉強会アンケートより

アンケートにてご記入いただいたご質問にお答えします。

ご質問	お答え
宗門のことを詳しく聞きたかった	宗門改帳のご質問ですね。 江戸時代寛文四年 1664 年に、キリスト教を禁止する目的で宗門人別帳（宗門改帳）が全国で施行され、江戸時代を通して作られました。 内容は、戸別に、戸主と全家族・奉公人の名前・性別・年齢と宗旨と旦那寺が記されています。乙川文書では、戸別の石高（高持百姓、無高百姓）の区別がされています。 キリシタン改と人口調査を兼ねた基本帳簿であり、乙川文書では毎年三月に作成され、藩に提出されました。 半田市立博物館には乙川村の天保年間から明治四年までが保存されています。
手紙や日記などの文書は残っているか	手紙は保存されていますが日記はありません。
毎回同じアンケート内容ですが調査した効果がありますか。	アンケートをいただいて、勉強会の時間配分、講座の難易度、講義の程度を開催者が知ること、次回以降の勉強会の構成を修正しています。たとえば、黒板に翻刻文を講師が書き上げて、特徴的な文字・熟語を解説することを導入し、受講者の方の理解が進んだと思います。
貨幣の換算が難しい	江戸時代の貨幣体系は、前期と後期では少し異なりますが大まかに示すと、 金貨は両・分・朱で表され、1両は4分（ブ）、1分は4朱（シュ）、1両は金10匁（37.5グラム）です。 銀貨は匁・分（フン）・厘・毛で表され、60匁で金1両に相当、銀1匁は10分（フン）、1分は10厘、1厘は10毛です。 銅貨：文（銭、1文銭とも表わされます）、6000文で金1両の換算 通貨は、金銀銅貨ですが、給与や人工賃などは米で支払われることがあり、その場合、7替え（米7斗が金1両に相当）などと換算方法が併記されるのが通例です。 代金などの表現は、 金一両三分ト銀五匁五厘、銭三百三拾文などと金、銀、銅貨で示されます。 ここでの「ト」は金貨と銀貨の間に書かれ、「アンド」の意味と考えています。銀貨と銅貨の間にはなにも書かれないのが通例です。

	エピソードとしては、江戸時代外国例えばスペインでは金と銀の交換比率が1対12であり、日本に銀も持ちこんで金に換えると儲かることが判明し、数10万両金が海外流出したことがあります。幕府はこれを知り、金の流出を止めました。
もう少し初歩講座があると助かります	昨、一昨年（令和5年、6年）には、初歩講座を別途に開催いたしました。内容は、江戸時代の文体であるくずし字が少ない文章またはヨミガナがすべてついている文を選び、古文書の文体（句読点がない、熟語がない、漢文調になる基準点、くずし字の書き順は清書と同じこと、等々）を勉強する講座でした。令和7年度も初歩講座を考えています。
（古文書は）いろんな方言がある様に、全国統一の書き方だったのだろうか。	江戸時代は、文言不一致の時代です。 話し言葉は、全国で様々な方言でしたが、文章を書くとなるといわゆる文語体で画一的な文章でした。 明治の文豪夏目漱石は文言一致に苦労しました。彼はイギリスに留学した時まずびっくりしたのは、イギリス人は話している言葉と書いている文章が同じであることでした。 明治の初めの時代では、文言不一致なので、今から思うと不思議ですが、話す言葉をそのまま文章にすることが出来なかったのです。夏目漱石はこれを打破するため、頭にあらがった話し言葉の英語をまず英語で書き、英語を中国語に翻訳し、中国語を日本語に訳すことにより初めて口語体の文章が出来たといえます。 今日私たちも、手紙の最初に、拝啓、終わりに敬具を書かないとどうも気分がよくないですね、ひょっとすると遺伝子に文語体が刻まれているのかもしれません。